

6 「大智という仕事」

神奈川県相模原市の障害者施設で起きた事件で、NHKは番組掲示板で事件に対する意見を募集した。そこに「次郎という仕事」というカキコミがあり、Eテレの番組にもなった。番組では知的障害がある22歳の次郎君が、いろんな人の助けを借りながら地域で楽しく暮らしている様子が映し出され、母親佳子さんのカキコミが紹介されていた。

「私は障がい者と健常者の間にある重い扉を開けるのが次郎と私の仕事だと思っっている。地域の中に障がい者がいることを当たり前の風景にしたい」

「次郎という仕事」という言葉を聞き、私の日常や願いを「大智という仕事」で表現することにした。

それは各種イベントで「車椅子での参加申し込みは想定内」という社会の実現への願いであり行動である。私が登録している土業の勉強会に参加申し込みをしたが、数段の段差のため出席を断られたことがある。具体的な介助の方法を提示したところ、一転して勉強会に参加でき

た。今では責任者から「この会場は今後使わない」との言葉を頂いている。

大阪市のある区役所が募集した「大川から川巡り」のイベントに申し込んだ。担当者から言われた。「船に車椅子は積めないで申し込みは受理できない」。私は

「障害者差別解消法では合理的配慮は自治体の義務ではないか」と声を荒げた。乗船口で車椅子を預かることで申し込みは受理された。

「大智という仕事」には、地元小・中学校でのボランティア活動も含まれる。中学校では定期試験一週間前の期間に放課後の教室で希望者の自習会がある。私は生徒たちの机の周りを回り、数学や英語の問題を解くためのアドバイスをして

いる。初めて障害者に接する生徒たちの戸惑いに私も怯むこともあるが、校長先生から「この地域の教育に山戸さんは必要な存在」との言葉を頂き、大きな支えになっている。

8年前から見守り隊として毎朝、自宅マンションの子供たちと一緒に小学校に

登校している。小学校の入学式、卒業式、体育会では夫婦で来賓席に案内され、紹介される。先日、小学校の校長先生が私達夫婦におっしゃった。

「本校の児童は毎朝校門で山戸さんと挨拶を交わすのが当たり前の風景になっています」

「大智という仕事」に最近新たな視点が加わった。ヒントになったのは、障害者が主宰するサロンの機関誌に掲載された大学の先生のコラムだ。

「もし大学の教職員の中に何人も車椅子を利用していている人がいたら、『車椅子を使いながら就職できるところはあるのだろうか』と悩む学生はずっと少なくなると思いますよ」

近い将来、誰もが車椅子生活になる可能性がある。万一そうなくても、参加したい場所に車椅子の方がいれば、そこは安心できる場所であり続けるのではないだろうか。

様々な困難や葛藤もあるが、今日も私は「大智という仕事」に挑んでいく。